



いとう



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

一意 ICHII SENSIN 専心

サムライ

御所をまもった土佐の士

— 藩邸史料にみる警衛の世界 — 展 開催中!

藩邸史料の魅力

本展は、副題にあるように「藩邸史料」展です。この正式名称を「土佐藩京都藩邸史料」といいます。その名のとおり、京都にあった土佐藩の藩邸に残された、500点を超える古文書群の総称です(当館所蔵)。幕末の京都での土佐藩の活動を知るために欠かすことのできない貴重な記録です。

古文書と聞いて、難しいと敬遠される方もいらっしゃるかと思います。しかし、古文書は、当時を生きた人々の生の声です。藩邸史料には、政治的なものから世俗的なものまで、建前から本音まで、そして藩主から無名のサムライ達に至るまで、土佐藩の多くの人々の「思い」があらわれます。今回、展示する古文書はすべてに、現代語訳を付けています。じっくり読めば、幕末の京都にいた土佐のサムライ達の様々な「思い」に触れることができるでしょう。

本展の内容

本展のメインテーマは、土佐藩の禁門警衛です。禁門とは、

平成30年度第5回目の企画展

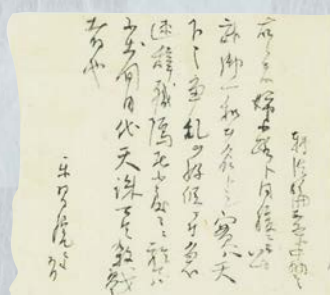
「御所をまもった土佐の士—藩邸史料にみる警衛の世界—」展が、3月2日(土)にはじまり、現在開催されています。本展をお楽しみいただくためのポイントをあらためてご紹介します。

御所を取り囲む外郭門(京都御苑の外郭門として現存)のこと、そのうちのひとつ清和院門を守ったのが土佐藩でした。藩邸史料から、このことについて記された内容のもの16点を厳選し、関連資料を含め総数33点の資料を展示しています。

御所を取り囲む外郭門(京都御苑の外郭門として現存)のこと、そのうちのひとつ清和院門を守ったのが土佐藩でした。藩邸史料から、このことについて記された内容のもの16点を厳選し、関連資料を含め総数33点の資料を展示しています。

高山 嘉明

禁門警衛の直接のきっかけは、文久3(1863)年5月20日、尊攘派を代表する公卿となっていた姉小路公知の暗殺事件でした。禁門の内側区域で公卿が暗殺されるという衝撃的な事件の翌日、土佐藩の清和院門をはじめ、九つの禁門それぞれに警衛担当藩が割り振られました。その後、八月十八日政変、禁門の変(蛤御門の変)という幕末の京都を代表する事件にも、土佐藩は禁門警衛を通じて関与したことになります。そして元治元(1864)年7月19日に起きた禁門の変の直後、幕府から大坂警衛への専念を命じられることで、土佐藩の清和院門警衛は終焉を迎えました。この間わずか1年あまりでしたが、禁門警衛をめぐっては藩内外の思惑



藩邸史料より三条実美への脅迫状。当時の京都では、脅迫は常套手段で、暗殺事件も多発した。



志士の肖像

— 公文菊僊と龍馬を描いた絵師たち — 展



公文菊僊画坂本龍馬肖像

(坂本ツル氏蔵)

菊僊の画に、大正2年(1913)、日本海海戦を勝利に導いた東郷平八郎が賛を書き入れた貴重なもので、昭和4年に東京・青山会館で開かれた土佐勤王志士遺墨展覧会にも出品された。この画の龍馬は靴姿。

本年度最初の企画展は、龍馬や志士の肖像画を数多く描いた公文菊僊をテーマに開催予定である。私たちがよく目にする龍馬の肖像画は、どのような経緯で描かれたものだろうか。

公文菊僊(1873〜1945)は現在の高知市生まれで、日本画家の久保田米僊に学んだ。明治40年(1907)、高知の美術家の集まりである「土陽美術会」が発足、菊僊はこれに加わり、以後、同会発行の雑誌『土陽美術』に作品を発表している。

この頃から、菊僊は龍馬を始めとする維新の人物の肖像画制作に取り組んだ。時期は明確でないが、特に龍馬については等身大の肖像画を描き、明治天皇の後である昭憲皇后に献上した。この龍馬肖像画はその後、縮写の要望が海軍の水交社を通じて多く寄せられ、昭和4年(1929)にはパンフレットを発行、1幅35円で大規模に頒布する事業となった。どのくらいの数が出回ったか記録はないが、パンフレットを発行した時点で既に2千幅が描かれたという。精粗はあるが、絵は印刷ではなく肉筆である。

龍馬の肖像画は、左手に刀を持った立ち姿で、中島気山などの賛が入ったものが多い。興味深いのは足元で、絵によって靴を履いたものと黒足袋を履いたものがある。2千幅以上を描いた菊僊が途中で方針を変えたのかもしれないが、理由は全くわからない。

志士の肖像を描くことは、明治以降盛んになった志士顕彰の流れと無関係ではない。本展を通じ、こうした歴史的事象にも迫りたいと考える。

亀尾 美香

「志士の肖像

— 公文菊僊と龍馬を描いた絵師たち — 展

■会期：平成31年4月27日(土)〜

7月15日(月・祝) 無休

■関連イベント

①講演会「公文菊僊の肖像」

(高知県立美術館学芸員 中谷有里氏)

6月29日(土) 13時30分

新館1Fホール ※要事前申し込み

②担当学芸員によるギャラリートーク

5月18日(土)、6月15日(土)

いずれも14時〜 ※申し込み不要

特別展

「龍馬展

— 真物から感じる龍馬の魂 — を終えて

本特別展は、本来、新館の開館記念として、京都国立博物館所蔵の国重要文化財の龍馬関係資料などを借用展示したいと考えていたが、展示ケース内の環境改善が間に合わず、断念せざるを得なかった。

企画展示室で10月2日から開催する予定だったプレ企画を中止し、約1ヶ月間企画展示室を閉室して、環境整備を行った。こうして、有害物質の数値が基準値以内に収まったケースにだけ資料をお借りして展示を行った。

その中で、最も来館者の関心が高かったのは、岡田以蔵所用と伝わる拳銃だった。当館では、リニューアル前から数えて3回目の展示だったが、今まで以上に大きな反響があった。今回は高知城歴史博物館から岡田家の郷土年譜をお借りし、個人蔵の拳銃と合わせて展示を行ったことにより、岡田家の背景も知っていただくことができた。その他では、龍馬の誕生日・命日である11月15日から龍馬祭りの行われた18日まで、4日間限定で龍馬の湿板写真の原板を展示し、大変好評を博した。また、高松太郎宛の龍馬書簡や若い頃に龍馬が持っていたと考えられる左行秀の刀など、大変貴重な資料も展示させていただいた。さらに、福井県立博物館からは、由利公正関係資料を3点お借りした。



以蔵の拳銃と岡田家郷土年譜

今回、環境問題の關係上、会期の1ヶ月半前に大幅な内容変更を行わざるを得なかった。その中で、個人の方や福井県立歴史博物館、北川村立中岡慎太郎館、高知県立高知城歴史博物館、高知県立図書館、高知県立歴史民俗資料館からご理解をいただき、多くの資料をお貸しいただいたことに感謝の意を表したい。今後は安心して借用展示できるよう、環境維持に努め、充実した企画展示を行ってきたい。

三浦 夏樹

好評だった「連続講演会」

幕末維新期を研究されている方をお招きした講演会を、昨年10月から本年1月にかけて毎月1回行いました(11月のみ2回)。ひとつのテーマで毎月行う講演会なので、本事業を「連続講演会」と名付けました。平成30年度のテーマは「坂本龍馬とその時代」とし、様々な視点から、龍馬自身についてはもちろん、彼が生きた時代を考えていただく機会となりました。講師および演題は左表のとおりです。

上写真 11月24日の講演会

開催日	講師 *敬称略	演題
10月27日(土)	知野 文哉 (歴史研究家)	慶応3年の坂本龍馬と「船中八策」
11月3日(土・祝)	宮川 禎一 (京都国立博物館 上席研究員)	坂本龍馬と大政奉還 ー将軍辞職策をめぐるー
11月24日(土)	豊田 満広 (中岡慎太郎館 係長・学芸員)	中岡慎太郎が 歴史に名前を残した理由
12月9日(日)	大石 学 (東京学芸大学 教授)	幕末大河と坂本龍馬 ー時代考証の経験からー
1月12日(土)	倉持 基 (大東文化大学 講師)	写真の中の英雄たち ー歴史資料としての古写真ー

いずれの回も、今までにない切り口でのお話で、聴講された方にとっても聞きごたえのある講演であったことが、次のような参加者アンケートでの意見からもうかがえます。

●龍馬について、土佐に住みながらも、長年違和感があり、詳しく知ろうとは思ってなかったが、あらためて龍馬のことを知ってみたいと、この連続講座に申し込んだが、非常によかった。
(10月27日、60代)

●講演内容もはじめて聞く話ばかりだったので、ひとつの説であってもとても興味を持てました。この様なサービスがあるのなら今後も足を運びたいと思いました。
(11月3日、50代)

●もっと調べたり勉強したりして、中岡慎太郎という人を知り、友人に話したりして広めたいと思いました。
(11月24日)

●「幕末」を勝ち負けという視点でなく、近代日本への橋がかりとしてとらえるという大石氏の考えに大いに共感しました。
(12月9日、70代)

●この度、ずっと幕末維新講座を聴講させて頂きました。知識不足ながら、資料

を読み、お話を聞き、本を読んだりして興味をもって勉強しました。自分なりに幕末で活躍した人々(特に土佐)を知りました。
(1月12日、70代)

近年、分野を問わず多くの博物館が様々な教育普及活動を行っています。ワークショップ、町歩きや観察会…など教育普及活動は多様化していますが、その中でも、安定の定位置にある(?)のが「講演会」ではないでしょうか。講演会には、展覧会の内容に関連したもの、他、今回のように独立したテーマによるものもありますが、いずれにしても、大学の先生レベルの研究者による最新の研究成果を、わかりやすく聞くことができる貴重な機会といえます。博物館で開催される場合、入館料を払えば無料で聴講できるものが一般的だと思います。つまり、非常に内容の濃いお話を無料で聞けて、時間があれば展示も楽しめる、お話の内容によっては展示を2倍も3倍も楽しくみることができるとはいいかもしれません。気軽に専門的な話を聴講することができる、博物館の講演会は、大人の知的好奇心を満足させる事業だと思います。次年度の連続講演会「幕末キーパーソンー龍馬をめぐる人々」もどうぞお楽しみに。

河村章代

「ジョン・マンと呼ばれた男『中濱万次郎』展（昨年12月29日～2月24日）」は58日間の日程で、約26,000人の方たちにご覧いただくことができた。

会期中、印象的だったのは万次郎の手紙を食い入るようになっている人たちの姿であった。日本初公開ということもあるのだが、アメリカの恩人に送った万次郎の直筆書簡に対する興奮がその後ろ姿からも伝わってくるようだった。実は私もその一人である。

船長と海軍大尉宛の手紙

私が初めて万次郎の手紙を見たのは2年前の秋、アメリカ合衆国へ調査に出かけたときだった。手紙の宛て先は2人の人物である。一人は万次郎たちを救出した捕鯨船ジョン・ハウランド号のホイットフィールド船長で、手紙を見たのは東部マサチューセッツ州にあるニューベッドフォード捕鯨博物館であった。船長から5代目のロバート・ホイットフィールド氏はフロリダに住んでいるが、同館での特別展に展示されていた。1847年、1848年、

1860年という日付も万次郎の変遷を如実に感じられるものである。

またもう一人の相手は、アメリカ海軍のジョンM・ブルック大尉である。ブルック大尉は万延元（1860）年日米修好通商条約の批准書交換の際、正使一行の随伴艦・咸臨丸の技術アドバイザーとして乗船し、日本艦初の太平洋横断に貢献した。手紙を見たのは南部バージニア州レキシントンに住む大尉のひ孫ジョージM・ブルックご夫妻の自宅で、インクの跡も鮮やかな160年前の手紙であった。

「friend」と本人のサイン

初めて日本で公開する万次郎書簡を目の当たりにし、改めて直筆のすごさを感じることができた。少し手紙を見てみよう。

まず、ホイットフィールド船長に宛てた次の3通である。①1847年3月12日グアムにて②1848年10月30日ホノルル（ハワイ）にて③1860年5月2日サンドイッチ・アイランド（ハワイ）にて。

それらの書き出しにある言葉「friend」に注目する。①「Respected Friend＝尊敬する友へ」、②「Kind friend＝優しい友へ」、③「My Honored friend＝尊敬する友へ」となっている。①の文中には「you are my best friend on the earth＝あなたはこの世で最良の友です」、③では「my Dear my friend＝親愛なる友であるあなた」、文末には「I remean your friend＝（私は）あなたの友である続ける」などとある。

同時代の他の人の手紙と万次郎書簡を比較するまでに至っていないが、万次郎とホイットフィールド船長との間柄で考えてみる。

①の手紙は救助されてから約6年後、万次郎は捕鯨船フランクリン号の乗組員として2回目の捕鯨航海に出航して10カ月。万次郎より先に捕鯨航海に出ていたホイットフィールド船長と別れてからは2年5カ月が経っている。万次郎は20歳になっていた。

命の恩人であり、捕鯨船員となった万次郎にとって船長というトップの立場にあるホイットフィールドに対して、「friend＝友」という言葉は特別な意味を持つのだろうか。それよりも、万次郎が言うところの「まるで実の父親のように私（万次郎）の面倒を見てくれた」ホイットフィールドが、いかに万次郎に対して民主的かつ博愛的な考え方を教えたのかが分かる。万次郎は船長の下で、民主的な自由と平等という考え方を体得したのだと思う。無人島での救出後約3年半を共に過ごした船長と万次郎との蜜月が、鎖国時代の日本人には到底考えられな「friend」という言葉を生んだのだろう。

また、文末にあるサインも「①は「John Mung Japanese」②は「John Mung」③は「John Mungero」である。①②は米国捕鯨船員時代でジョン・マンと呼ばれた時期。特に①では、「日本人」と書いている。日本の鎖国時代に現代の私たちのように日本人というアイデンティティを明確にしている万次郎に驚く。③は幕臣となって咸臨丸で渡米した帰路に書いたもので、「サムライ」と

なり、名字を持った万次郎である。それでも親しい船長には「ジョン万次郎」というサインを認めた。

堂々と生きた万次郎

一方、幕府艦船に通訳として公的に乗り組んだ万次郎が、合衆国海軍ブルック大尉に宛てた手紙も興味深い。1860年5月7日の日付である。ここでもやはり「Dear Friend」から始まり、最後には「I am your most warmest friend＝あなたの最も親しい友人」とある。サインは「Naccharma Mungero」（中濱万次郎）である。貧しい漁民の次男であった万次郎が幕臣となり、米国海軍大尉に「友人」であることを明言するあたり、堂々と生きた万次郎を思う。真物書簡によって、万次郎のスペリングもはっきりした。

書き出しと文末だけでも万次郎その人に触れることができる。今回の企画展を端緒にして、より万次郎の素顔に近づく研究を続けていきたい。



万次郎書簡（原本、翻刻、翻訳）をはじめ、企画展で展示した全資料や内容を収めた小冊子をショップで販売しています。ぜひご覧ください。（頒価 500 円）

龍馬の手紙

02

此状もつて行者ニ、せんの大廻の荷のやり所がしれん言ハれんぞよ
此男のに物ぢやあきに、状が龍馬から来たけんぞまぢがつたと御いゝ可被下候

(安政五年七月頃乙女宛)

24歳(満23歳)の龍馬は、土佐弁丸出しである。「この手紙を持って行く者に、前に大回り船で送った荷物の方が分からんとは言われんぞよ。この男の荷物じゃあきに、手紙が龍馬から来たけんぞ間違つたと言っておいてください」。現代風に読むとこんな感じだが、口に出して原文で読んでみる方が面白い。これは書き出しの文になっているが、のちの龍馬の癖からみると追伸のようである。

手紙全体から龍馬の若さがあふれている。土佐訛だけでなく田舎臭さの抜けなところ、何ともほほえましい。脱藩とか勤王とかまだ関係のない頃である。日付と宛先のない手紙であるが、本文にある北辰一刀流の他流試合のことなどから二回目の江戸行きから帰国する直前であること。手紙の書き方がざつぐばらんで、ここにある手紙を託した人へ失礼のないようにたしなめていること。文中には「○がない」と言って暗に金をねだっていることなどから、気心の知れた姉乙女に宛てたことが分かる。

今の高知県民には発音がたい、土佐弁特有の発音「ぢ」(じ)の使い分け。近年土佐弁の代表みたいにならなっている「ぜよ」ではなく、龍馬は「ぞよ」を使っていたことも分かる。この手紙を読むたび、最近聞くことのない本来の土佐弁を聞いてみたいものだと思う。時代の空気もあふれている。

本文は「先便差出し申し候しよふ婦は皆々ある付申候よし」(前の便で送っておりました)という(江戸・堀切の)菅浦は全部根づいたということですね)と始まっており、「ありつく」という土佐弁や龍馬の家族に対する思いや行動、坂本家の様子がうかがえるのも興味深い。

作家・宮地佐一郎氏は『龍馬の手紙』でこの手紙を掲載するにあたり、当初「しよふ婦」を「娼婦」と読んでいたという。なかなか意味がつかないことを眞喜子夫人に話したのだろう。眞喜子さんが「あなた、それは『菅浦』じゃありませんか」ということで一件落着。これもまた、ほほえましいエピソードである。

現在は北海道・浦臼町所蔵となっているが、旧蔵者の同町・前田寿子さんが自宅ですべてに保管されていた。初めて前田家で拝見したとき、寿子さんは「先祖から伝わるこの手紙があるので神経が休まりません」と言っていたことを思い出す。土佐からはるばる渡道したこの手紙は、土佐出身の坂本家や前田家の歴史とともにあったものである。

前田 由紀枝

私の
おすすめ
No.2

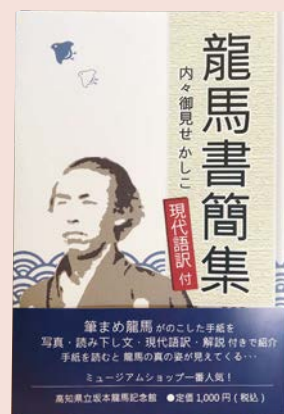
『龍馬書簡集』

「龍馬の志を感じる」

今回私がおすすめするのは当館から発売されている『龍馬書簡集』です。

当館が所蔵している龍馬の手紙を収録しています。すべてに、読み下し文、現代語訳、解説をつけて、よみやすく配列した本です。龍馬について学びたい方の入門編としてもぴったりの一冊となっています。手紙として遺した龍馬の志を感じていただきたいと思います。

今回はその中でも私のお気に入りを通紹介したいと思います。慶応3年10月13日、後藤象二郎宛草案です。いよいよ大政奉還の可否を決める日、龍馬は二条城へ登城する後藤に決死の覚悟で臨めと檄文を送りました。しかし、よほど力が入ったのか(後藤)先生を「生生」と書き損じ、これを下書きとして手元に残しました。このときの緊張と高まりが直に伝わる第一級資料だと言われています。当館で真物を鑑賞していただき、書簡集で改めて理解を深



めていただけるとより楽しめると思っています。
最後に今回の龍馬書簡集は当館のミュージアムショップ、または当館のHPからでもご購入いただけます。興味のある方はぜひご検討をよろしくお願いいたします。

中西 洸太郎



飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！

視聴方法は簡単！

- ① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
- ② アプリを起動し、マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2018年9月30日まで閲覧可能です。



拜啓 龍馬殿

180通

平成30年12月21日〜平成31年3月20日



31年前、交通事故で重傷をおい、寝たきりの状態の時、龍馬を愛する女子として友人に知られていた私に、桂浜に行ってきたとお土産に龍馬の像をもらいました。病床におき「いつか歩けるようになったら必ず桂浜まで逢いにいく」と心に決めてから随分と長い時が経ちました。今、乳ガンの手術を終え、治療をしているこの時、ここで念願の龍馬に逢えたこと、本当に感動の涙にぐれましました。身も心も弱っている時、いつも龍馬に勇気づけられます。いつまでもいつまでも心の底に龍馬の強い心を感じながら頑張っていきたいと思います。私の生命も、洗濯、!!桂浜の夕日をあびながら。かしこ追伸 呼び捨てにしてしまい大変申し訳ありません。

(12月22日 東京 M・T 56歳 女性)



私は坂本龍馬さんが大好きで、とても素敵にしています。もし暗殺されてなければ、もっと日本が良い方向に発展していたと思います。今の日本は先の事ばかり考えており、坂本さんの事や歴史を学んでほしいと思っています。僕ももっと学んで日本にやくに立つ人になりたいです。

(12月23日 東京 T・W 11歳 男子)



今回3回目の来館です。いつか子ども達連れて来たいと思っていた所、念願叶い5人で来る事ができました。これも龍馬様のおかげ合わせ！今年の京都での命日祭も参加することができ、よい一年の締めくくりとなりました。これからも、来年からも龍馬様を見習い、前向きに色んな事にチャレンジします！今日の日に感謝!!

(12月23日 広島 K・S 57歳 女性)



30数年越の夢が叶い、ここ桂浜へやって来る事ができました。私の人生観に大きな影響を与えた龍馬様の生まれた地、影響を与えたこの海を見られて感無量です。本当に来られてうれしい限り、夢は持ち続けたいのだと教えてもらいました。ありがとうございます。京都、長崎と巡り、土佐に来られたことに感謝です。

(12月24日 青森 R・H 53歳 女性)



お久しぶりです。去年はここには来られなかったので二年ぶりにあなたに会うことができました。二年たつてもやはりあなたへの憧れは変わることなく続いています。思えばこれが何回目かの「龍馬詣で」でしょう。でも何度来てもあなたは私に大きな志と明日への勇気をくださいます。これからも何度でもここへ来ます。その度に、よく知っているあなたと、新しく発見するあなたに会えることを楽しみにしています。

(12月25日 奈良 N・I 55歳 男性)



大学生の頃に「竜馬がゆく」を読んで以来のファンです。医学部を卒業して十年、医師として今後の生き方に迷って、高知に旅行に来ました。私も自分でじっくり考えて生きていきたい。また来るとしています。

(10月2日 青森 T・K 34歳 男性)



こんにちは。私は龍馬さんに一つ質問したいことがあります。どうしたらそんなに夢と優しさに満ちあふれた人間になれるのですか。そしてどうしたらそんなにあることに熱中して、必死にやり遂げられるのでしょうか。実は私はあることを「やるぞ!」と思っても、なかなか続かないし、他のことに気を取られてしまいます。あなたの精神の強さは、剣術とお姉さんの御指導でしょうか。日本中を走ってつれていてほしい。どうぞゆっくり休んでください。

(12月26日 13歳 女性)



人生初の高知に来ました。龍馬さんに会いたいです。一昨日、会社員を脱藩し、学生の頃から描いていた独立を果たしました。今はまだ一人の個人事業主ですが、同志を集めて「人を幸せにする事業」を作りたいと思います。改めて龍馬さんの生きた時代を本日学ばせて頂き、たった一五〇年生まれるタイミングが違っていたら、自分は自由に旅をする事も、夢を描くこともできなかったのか!と実感しました。今僕が自分で道を自由に決めて進めるのは、近代国家を作ってくださった龍馬さん含

ここは館長の部屋

高松 清之

赤松 小三郎?!

先日来館者の方々からのアンケートの中で、「赤松 小三郎を知っていますか?」との記述が目につきました。館長を務めるようになって3年が過ぎようとしているが、不勉強のせいもあって、全くの初耳であったため少し調べてみて、「目から鱗が...」であった。

赤松は信濃の国、上田藩士。天保2年の生まれで、龍馬より4歳年上。勝海舟の門下に入り、長崎の海軍伝習所で兵学や航海術などを修めた後、江戸に出て英国の騎兵士官から英語や騎兵術を学び、慶応2年には、兵学者として薩摩藩の京都藩邸に開いた塾などで、薩摩はもとより会津や肥後、大垣などの藩士を門下生にして、英国式の兵学を教授している。門下生の中には、中村半次郎や村田新八、東郷平八郎などがあり、薩摩藩の兵制が英国式へと転換する際に大きな役割を果たしたといわれている。

ここまでは、龍馬との関係などとは見当たらないのだが、「目から鱗が」というのは、四侯会議が続いていた慶応3年5月に、赤松が越前の前藩主・松平春嶽に建白した「御改正之一二端奉申上候口上書」の存在である。その建白書では、上・下議政局からなる二院制の議会の設置や入札(選挙)による議員の選出、しかも、現在の大臣に当たる宰相6人の人選を議政局が行うという議院内閣制度までも提言しているのである。また、この他にも、欧米の金や銀の価値にあわせて金貨・銀貨を改鑄することや最新の装備を持った陸海軍を置くこと、さらには、殖産興業の必要性などにも言及している。そして、こ

の口上書と同様の内容の建白が、薩摩藩主の父・島津久光や幕府に対しても行われたとのことである。

皆さんご承知のとおり、龍馬が後藤象二郎とともに土佐藩船「夕顔」に乗り込み、長崎から大坂へと向かう航海の途中で「八策」を示したとされるのは、慶応3年6月のこと。赤松の建白はその前月である。議会制度や陸海軍の設置、金銀のレートのことなどは、暗殺直前に龍馬が記した「新政府綱領八策」の第5・6・8義などと重なってくる。

龍馬と重なるという点でもう一つ。赤松小三郎は、龍馬に先立つこと2か月ほど前の慶応3年9月、自分の門下生であった中村半次郎など薩摩藩士の手によって京都で暗殺されている。口上書に見られる議会制の導入やあくまで内戦を避けるべきだとする赤松の考え方が、既に武力討幕へと傾いていた薩摩藩の方針と相容れなかったことや、彼が薩摩藩の軍事機密を知りすぎていたことなどが要因だと言われている。

龍馬の功績や評価にも大いに関係してくる人物だけに、今回のアンケートをきっかけに、彼に関しても学んでみたいと思う。なお、本稿では、関良基氏の『赤松小三郎ともう一つの明治維新』(2016年(株)作品社)を参考とさせていただいた。

む幕末の志士の皆さんのお陰です。本当にありがとうございます。初めに日本に株式会社を設立した龍馬さんの背中と行動力を見習い、世の中に恥じない立派な事業家になってみせます。また節目にお伺いさせて頂き、成長した姿を報告させて頂きます。桂浜から見守っていてください。よろしくお願い致します。

(12月29日 神奈川 K・H 25歳 男性)

私の息子は今、小学5年生です。なんと名前が「りょうま」です。龍馬さんのように広い視野をもち、難しいことにも恐れず挑戦していく男子に成長してほしいと願っています。ありがたいことにとても元気で友達も多く、何でも前向きにチャレンジする子です。小5ですが多少反抗的なところもあり、親子でたびたびバトルとなりますが、仲も良いため、最終的には薩長同盟のごとく終わります。今から受験に向かって頑張っている半面、太鼓の達人のレベルをあげたいとよくわからない方面へも向かっていて、母としてはため息もつきながら応援しています。彼の大きな夢が叶いますように、どうぞ見守ってください。

(12月30日 愛媛 A・H 41歳 女性)

幕末の凄さが改めて分かる展示がたくさんありました。龍馬さんが思い描いた日本は実現されているのでしょうか。ぜひ進化をとげた今の日本を見てもらいたいなと思いました。また真面目だと思っていたのに文面ではとてもユニークだなと感じました。楽しそうな人柄が人や時代を動かしていたのだと思いました。

(12月30日 広島 I・O 14歳 女子)

本当に本当にサイコーです。日本をせんたく！です。どんな社会にしたいか：あきらめず、ビジョンを持ち、人々が自分の強みをつかったクリエイティブでいられる社会、それを作りたいです。仲間を楽しく、ワクワク、そして周りを気にせず！でも着実に動いて変化をもたらす。そんな生き方にしていきたい。人々にもっと幸せを！可能性を！本当に龍馬さんには心から感謝！わたしもせんたくし続けまーす！

(12月30日 東京 K・K 42歳 女性)

平成がいよいよ終わろうとしています。「平成」という言葉の通り、戦争のない時代の日本に生まれ育ち、幸せに暮らしてこられました。これも龍馬さんや先人の皆さんが日本の基礎を作っ

てくれたおかげなのかなと思います。これからも平和が続きますように。世界が少しでも平和に近づきますように。

(1月7日 29歳 女性)

この海から船出された龍馬様。日本の未来を自分の手で変えられと思ったそのパワーに感激。人をまきこむ力に感動。人に好かれる魅力がすごい。

(1月19日 徳島 T・W 63歳 女性)

私はつい最近まで龍馬さんのことをよく知りませんでした。たった33年しか生きていないのになぜこんな有名で、たくさんの人から愛されているのかわかりませんでした。きっかけはゲームでしたが、龍馬さんのことが好きになりました。で、どんな龍馬さんのことが好きになりました。武力ではなく話し合いで日本を変えようとした優しさや、家族への手紙の中で見せるおちやめさ。そして土佐の仲間たちを大切に思う情に厚いところなど、なんて魅力的な人なんだろうと思いました。あなたが目指した日本の未来で生きていることをうれしく思います。

(1月20日 福島 26歳 女性)

幼き頃、父にあなたの生涯をつづった本を見せてもらいました。小学生の時には、私はあなたに夢中で、学校の作文にもあなたの事を熱く書きつづりました。大人になると、何かある度にあなたの人生を思い起こし、自分も精一杯生きようと考えてるようになりました。そしてその生涯のみならず、死後も多くの人々を魅了し続けるあなたの生き様には本当に感動させられます。いつもほがらかでユーモアを忘れないあなたのように、私もどんな事も笑い飛ばして後悔のない人生を歩んでいきたいです。

(1月26日 香川 36歳 女性)

こちらへ来るのは二度目です。9年ほど前、歴史好きの父と、旅行好きの母を連れ、大好きな龍馬さんの記念館に来ました。土佐から大きな志を持ち、型にはまることなく、大きな視野を持つて大きくはばいた龍馬の行動は現代の私たちの心にも大きな影響を与え、今もなお、私たちの心を熱くさせてくれます。私は龍馬さんの「我ががなすことは我のみぞ知る」という言葉が大好きです。人に変わっている、おかしい、無理だとか何かと言われても、気持ちを強く、自分をたたく姿勢が大好き。現

代にいたら、間違いなく恋をしてしまいそうです。二度目来ても、やっぱり私の心が熱くなりました。

(1月29日 神奈川 N・I 41歳 女性)

小説の世界で貴殿と出会った学生時代より早30数年。やっと高知に来る機会を得、はるばる群馬からやって来ました。相も変わらずずわらしい事の多い会社員としての毎日ですが、自分のビジョンを見失うことなく、また明日より日々生きていこうと思います。貴殿の如く。

(1月30日 群馬 K・M 56歳 男性)

土佐はいい所です。土佐に生まれ土佐で育ち、いい人生をおくってます。ずっと土佐でいたいと思います。それほど土佐が好きです。田舎だと言われますが、テレビチャネル少ないと言われるが、それでも土佐が好き!!自分の生まれ育った土佐が好き!!龍馬さん、一度今の土佐を見に来て下さい。祭りにぎやかで楽しいですヨ。土佐のおさくで一緒に呑みましょうヨ。いい国土佐を見に来てくださいネ。待つてまゝ。まだまだ寒い節分の南国土佐より。

(2月3日 高知 Y・M 55歳 女性)

あなたという方を知りたく、武蔵の国から参りました。ここに来るまで、歴史という中で学んだあなたと、記念館で展示物から想像したあなたは全く異なっていました。思えば当時、二強と呼ばれていた薩摩と長州を武力ではなく、対話にて志を一致させたあなたの人間力は、考えれば普通の人間ではできないことです。私があなたの書籍から抱いた印象はユーモアに溢れ、思わず吹き出してしまふような可笑しい言葉、そしてそれと対照的な強い意志をお持ちな方だということです。歴史に見るような偉人達の他にも姉乙女様に宛てられた手紙にも人間性が垣間見えるような気がしました。今、私は桂浜を眺めながらこの手紙を書いています。あなたがここから見ていたのは明るい日本の未来ですか。あなたが描いていた日本は現実となっていますか。私もあなたのように志を持って意気揚々と生きて参ります。敬愛するあなたへ。

(2月4日 埼玉 K・I 22歳 男性)

土佐の方々には桂浜の広く大きな海をみて育ったと聞きます。私は海のない県で生まれ育ちましたので長らく海を知りませんでした。土佐の海は広い！たしかに細かいこと、小さなことに頭を悩ませる日々が馬鹿馬鹿しく思えてきました。あ

なたほどの大業はとても成し遂げられるとは思いませんが、私も小役人のはしくれとして、世の中の役に立てるよう、大きな目と心で頑張りたいと思います。では。

(2月10日 東京 K・Y 47歳 男性)

愛知県からはじめてやって参りました。岐阜県で中学の社会科教師をしています。幕末の激動の時代は何度か授業もし、とても好きな時代です。といった薩長同盟を結んだ、亀山社中というカンパニーをつくった、断片的なことしか知りませんでした。が、あなたの生き方、考え方にふれ、学ぶことができました。今は学校という狭い枠の中で生きているけれど（龍馬さんも土佐藩という小さな枠にとどまらず、世界に目を向けられましたねー）日本、世界に目を向け、社会の中で何が自分にできることをしたいという志があります。与えられた居場所ではなく、自分の手で道を切り拓き、居場所をつくりたいです。その思いが強くなりました。9月に入籍し、結婚休暇をとりだんなさんと来ました。来月結婚式です（笑）。志を大きくがんばります。みていてください。

(2月12日 愛知 S・N 25歳 女性)

初めてお便りします。53才にして初めてここに来ました。あなたはすごい人だなと日ごろから思っていました。今日改めてやはりすごい人だったのだと思いました。「すごい」と言えばたった3文字ですが、あなたの残した足跡は地球半周分！この半周をかけてあなたは人生を生ききったのです。その中でいく人もの出会いがあり、学び、失敗し、成長し、すばらしい人生を生きたのだと思います。人の命はいっしゅん。あなたのいっしゅんはすばらしかったです。私もこのいっしゅんのために出会った折にぜひハグをさせていただきます。

(2月13日 高知 Y 53歳 女性)

教科書で初めて知ったその日から、その生き様に惚れました。誕生日を祝いたくても命日でもあるのがとても切ないです…。これからますます尊敬しています。

(2月20日 21歳 女性)

■「2019年度は幕末の人気者でスタート！」

「幕末の志士人気ベスト10展」元祖「幕末企画展」



「幕末の人気者は？」古写真を土佐和紙に大きく引き伸ばすという方法で、混乱の幕末を駆け抜けた志士たちに焦点を合わせ、企画展「幕末写真館」展を平成19年12月17日～平成20年3月20日まで開催しました。期間中、140枚の写真の中から入館者の皆さんに「お気に入りの写真」を投票していただきました。これがきっかけで「幕末の志士人気ベスト10」展として恒例の展覧会となりました。今回で14回目を迎える集計結果はその集大成となります。



ベスト10展従来の展示風景



海見える・ぎゃういでは、4月25日(木)～7月12日(金)「幕末の志士人気ベスト10」展を開催します。

この展覧会は古写真を土佐和紙に大きく引き伸ばすという方法で、混乱の幕末を駆け抜けた志士たちに焦点を合わせ、企画展「幕末写真館」展を平成19年12月17日～平成20年3月20日まで開催しました。期間中140枚の写真の中から入館者の皆さんに「お気に入りの写真」を投票していただいたのがきっかけで、当館の入館者アンケートに「幕末のお気に入りの人物を教えてください」という項目ができました。それ以来「幕末の志士人気ベスト10」展として皆さまからご好評をいただく展覧会となり

り、14回を数えました。その中には色々なジャンルの作家作品とのコラボレーション展示などもありました。

そして今回は、昨年新館がオープンして以来の11ヶ月間の集計結果を、シンプルにパネル写真で展示します。1位はもちろん不動の「坂本龍馬」、断然トップです。2位は、つい先日まで企画展が開催されていた「ジョン万次郎」、3位は「西郷隆盛」。何ととっても昨年のNHK大河ドラマ「西郷どん」人気の影響もありそうです。それに続く志士達は、皆さまのお気に入りの人物が果たしてベスト10入りをしているのでしょうか？総得票数4418票の行方をご覧ください。

今後は「幕末の志士人気ベスト10」展にプラスアルファも予定しています。お子さんから大人の方も一緒に興味を持っていただけるような幕末の人物に関するものや、想像力と創造力を楽しめる内容に出来ればと思っています。

また、10月からの龍馬月間には、入館者の皆さまにも人気がある作家の展覧会を予定しています。

“海見える・ぎゃうい”は、“海を見ながら作品を鑑賞していただけるスペース”として、いつご来館いただいても愉しんでいただけるような空間づくりを皆さまとともに目指します。

中村 昌代

「過去13回の集計結果」

順位	氏名	得票数
1位	坂本 龍馬	2205票
2位	勝 海舟	2097票
3位	ジョン万次郎	1717票
4位	西郷 隆盛	1447票
5位	高杉 晋作	1301票
6位	土方 歳三	978票
7位	中岡 慎太郎	876票
8位	桂 小五郎	823票
9位	岩崎 弥太郎	669票
10位	坂本 龍	653票
11位	武市 半平太	482票
12位	沖田 総司	451票
13位	岡田 以蔵	375票
14位	近藤 勇	332票
15位	吉田 松陰	322票
16位	天璋院	230票
17位	徳川 慶喜	203票
18位	板垣 退助	166票
19位	マシュー・ペリー	150票
20位	斎藤 一	139票

「幕末の志士人気ベスト10」14回目の集計結果

「幕末の志士人気ベスト10」展は、当館のアンケートにあるお気に入りの人物の集計結果をパネル写真で展示する展覧会です。14回目を迎える今回は、平成21年度～27年度の7年間の集計ランキングを20位まで発表します。

総得票数「36265票」

1位	坂本 龍馬(立像)	2205票
2位	勝 海舟	2097票
3位	ジョン万次郎	1717票
4位	西郷 隆盛	1447票
5位	高杉 晋作	1301票
6位	土方 歳三	978票
7位	中岡 慎太郎(美談)	876票
8位	桂 小五郎(木戸孝允)	823票
9位	岩崎 弥太郎	669票
10位	坂本 龍	653票
11位	武市 半平太	482票
12位	沖田 総司	451票
13位	岡田 以蔵	375票
14位	近藤 勇	332票
15位	吉田 松陰	322票
16位	天璋院	230票
17位	徳川 慶喜	203票
18位	板垣 退助	166票
19位	マシュー・ペリー	150票
20位	斎藤 一	139票

ベスト10展従来の展示風景

入館状況

2019年3月20日現在

(1991年11月15日開館以来 27年126日)

◆総入館者数 4,138,532人

◆グランドオープンまで 3,936,760人
(2017年4月1日～2018年4月20日休館)

■グランドオープン(2018年4月21日)以来 201,772人

編集後記

「平成最終号」をお届けします。平成3年開館の当館にとっては二つめの元号を迎えることになります。日常が特に変わるわけではありませんが、個人のレベルでも一つの時代が終わって「新たな時代」を迎えるように感じてしまうのも、思えば不思議な感覚です。改元の意味も政治情勢もまったく異なりますが、「新たな時代」に思いを託すのは、龍馬の時代も現代も同じなのかもしれません。それでは次号、「新時代第一号」でまたお目に掛かりましょう。(た)

館だより「飛騰」第109号

発行日 2019(平成31)年4月1日

発行 公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館

(年4回発行)表紙題字：書家 沢田 明子氏
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015
<http://www.ryoma-kinenkan.jp>
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休

入館料 一般 490円(企画展開催時 700円)

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。
〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで

私のテーマ

博物館教育 歴史資料を「鑑賞」する?!



河村 章代

「私が？」——本稿の依頼への私の第一声です。私は、芸専門員という職名で坂本龍馬記念館に勤務しておりますが、歴史学専攻ではなく（美術「史」専攻ではありませんが……）担当業務も企画広報、教育普及です。そんな私に、なぜ白羽の矢が……。

「鑑賞」とは「深く味わう事」

聞けば、渋谷先生がご推薦くださったとのこと。先生と初めてお会いしたのは15年ほど前、私が県立美術館に勤務し、開館10周年記念の展覧会「河田小龍——幕末土佐のハイカラ画人」展を担当した頃、先生が小龍の資料調査にお見えになった時と記憶しています。渋谷先生のご推薦なら……と畑違いは承知の上ですが、謹んでお請けした次第です。

さて、その「河田小龍」展会期中、アメリカ・アレナス氏による対話型鑑賞についての講演会がありました（アレナス氏は対話型鑑賞の第一人者です）。対話型鑑賞とは、作品の解釈や知識ではなく、鑑賞者の感想や意見を重視し、他者とのコミュニケーションをはかる……という鑑賞方法で、当時は（現在も）各地で

盛んに研究、実践がされ、筆者も出前授業などで行っております。

もうおわかりでしょう、私の研究テーマは博物館教育、主として鑑賞教育、なかでも「対話型鑑賞」に興味をもっています。対話型鑑賞は主に美術作品を対象に、作品の「解説」より、鑑賞者自身が「どう感じるか」を大切に、作品鑑賞を通じた参加者間の交流を大事にする鑑賞法です。画面に見えるものを各々発言することから始め、意見交換にすすみます。他者の発言に「なるほど」「そうかな」と思いつながら、自分の考えを深めていきます。鑑賞を通じて、色々な感想や意見を聴くことで、「自分とは違う意見の人がいる」ことに気づき、認め合うことから、対話型鑑賞は観察力や批判力、コミュニケーション力を育むことができますといわれています。

「鑑賞」とは「深く味わうこと」です。作者や制作年を覚えることではありません。つまり、「鑑賞」に必要なのは「自分で感じる、考える力」ではないかと思えます。「わからん」も、自分がそう感じたなら鑑賞です。歴史資料は美術作品とは違う、鑑賞は無理、とも言われますが、歴史資料も美術作品も「何が見えるか、どんな感じを受けるか」を入口に「深く味わうこと」は可能ではないか、と筆者は考えます。

龍馬の書簡をみて、内容はわからなくとも「味わいのある字」と思ったら、それは「鑑賞」だと思えます。そこから、現代語訳を読んだり、読めそうな字を探したり、紙の長さや署名の違いを他の資料と比べたり……色々な楽しみ方ができるでしょう。その時にファシリテーターや他の人との対話を通じて資料の面白さを発見していく、というのが、歴史資料での対話型鑑賞となるのではないのでしょうか。そこで興味を持ったうえで、内容や時代背景を自分で調べると、人の解説をただ聞いているときよりも10倍頭に入るのではないかと思います。

ひとり対話型鑑賞

と思うのです。その技をみかくのが「対話型」だと思えます。ひとりで見ている時でも、頭の中で「ひとり対話型鑑賞」をしていくと、鑑賞の楽しみがぐんと広がるのではないのでしょうか。つまり、対話型鑑賞を入口に資料への興味、関心を深めてもらいたいと思うのです。

常設展示室のたくさんの龍馬の書簡——見る人の感性や情報量は、龍馬ファン度によって感じ方は千差万別でしょう。知識や情報を得るだけなら書籍でもできます。博物館ならではの、資料を実際に見たときの感覚を大切にしながら、感性と知性のバランスをとった博物館の楽しみ方、歴史に親しむ入口として、歴史資料の「対話型鑑賞」がなかなかできないかなあ、と日々考えています。

そうとはいえ、鑑賞に知識や情報は全く不要とは思っていません。知識や情報があればより深く味わうこともできるでしょう。ただ、それだけに頼ると、知らない資料に出会うと「わからん、無理」と思考停止してしまうのではないかとも思えます。それはもったいない！それよりも、自分の知らない資料を前にしたとき、自分の五感と想像力をフル回転させる技、情報収集する技、ほかの人の感じ方や意見にも耳を傾け、できれば意見交換できる技を持つているほうが、楽しく見ることができ



県美の学芸員時代、来館した小学生と一緒に収蔵作品を鑑賞しているところです。（写真提供：高知県立美術館）

「サブ機能」を担う館へ

求する～

龍馬記念館 館長 高松 清之 さん

高松館長と龍馬記念館

高松清之館長さんは、「やり手の県庁マン」だったと思う。挨拶などをお願いした時に「何分ぐらいの挨拶をしたらいいかな？」とすぐに聞き返されることなどから直感的に感じる。「あ、だったら原稿用紙3枚分ね。了解。」と。

2016年春、館長就任後2か月ぐらいの時に、龍馬関係のある団体の会合で講師を務められたことがあった。講話の中身は「坂本家と高松のつながり」といったもので、ご先祖様と龍馬、そしてご自身の繋がりという興味深い内容で30分ほど述べられた。できれば現代龍馬学会の研究発表会においてもぜひお願いしたいと考えている。きっと、その時も「40分かね。じゃあ、原稿用紙20枚かな。」と即答されることだろう。

高松館長にインタビューをした。就任3年目、新館の建設、2018年4月21日のリニューアル・オープン。続いて6月16日にはわずか2か月足らずで「入館者5万人を達成」。9月1日には「10万人に到達」、それより前の7月15日には1991年の開館以来27年目で「400万人の入館者達成」と記録続きの毎日の中でインタビューに応じてくださった。(聞き手…宮英司)

高松館長と龍馬記念館との接点を尋ねると、間髪を入れずに、県庁勤務時代の観光部副部長職の折(2008年)、NHK大河ドラマでの「龍馬伝」の放映決定のことが出てきた。その決定にあわせて駅前パビリオン・幕末志士社中の建設、そして「土佐・龍馬であい博」の企画・準備等を挙げられた。そういえば、この時期の龍馬記念館はすさまじい入館ラッシュだったと聞く。通常の入館者が年間12～13万人のところ、

放映の前年(2009年度)が約25万人、放映年(2010年度)が44万人、翌年(2011年度)も約23万人だったというから驚きだ。

高松館長のご先祖様の話

龍馬が敬愛したという高松順蔵(龍馬の長姉・千鶴の夫)さん。その弟・高松勇蔵さんの末裔にあたるのが館長さん。高松家9代・郷土初代の高松平次右衛門清康から数えて17代目、勇蔵清則から数えると5代目になるという。

高松順蔵は「いごっそう」だったらしい。儒学者としての力もさることながら、和歌や剣にも優れていたという逸話が残る。容堂公からも招聘の話があったが応じず、弟の勇蔵に家督を譲って隠居してしまっただけ。また、順蔵の次弟・壽亭(とうてい)さんも華岡青洲の門下生であり、長崎でオランダ医学を学んだ優れた医者であったという。城下で開業し、お抱え医の話もあったが、彼もまた固辞して安田に帰ったとのこと。高松にはどうも「いごっそう」が多いようだ。

勇蔵さんは、館長から遡ること4代。おじいさんのおじいさんという関係。(別掲「家系図参照」)。「歴史の専門家でもない私に龍馬記念館の館長に就任せよ」ということは、そうしたご縁だったということなのか。という館長のつぶやきに繋がる。

新装なった龍馬記念館

高松館長に新しい記念館のイチ押しを尋ねてみました。

①常設展示室

龍馬の真筆をはじめ本物の資料が数多く並ぶ展示を実現した。幕末動乱の始まりから龍馬の死までを順番に眺めていくことができる。いつの間にか、幕末の学習が進み、龍馬の思いが伝わってくるような展示になっている。ぜひ、時間をかけて見学していただきたい。

③幕末写真館

幕末を生き抜いた人々の写真をよくあれだけ集められたものだと感じる。芸芸員の苦勞も並大抵のものではなかったと思う。残念ながら図書への収録や来館者の方々が撮影する許可をいただいていないので、この幕末写真館で眺めていただくしかないが、歴史通の方でも何人かは全くの初見の方がいるはず。

②海の見える・ぎやうりい太平洋を眼下に見下ろす最高



「龍馬研究のハブ」 ～龍馬との関わりを追

新しい龍馬記念館の使命

初代の小椋克己館長が「龍馬の入り口」を創った。二代の森健志郎館長が「龍馬の殿堂」へと発展させた。次は、「龍馬研究のハブ機能」を担うことのできる館に成長させていきたいと抱負を語ってくださった。(ハブ＝活動の拠点) これからの記念館は質量ともに高いものが求められる。これまで「博物館

類似施設」だった記念館は、今回のリニューアルを機に、「博物館相当施設」となった。

開館当初(1991年)、所蔵資料は30点くらいだった。2019年2月現在は1100点以上となっており、資料のデータベース化も進めている。また今後は、学芸員の体制もさらに充実させて、これまでの蓄

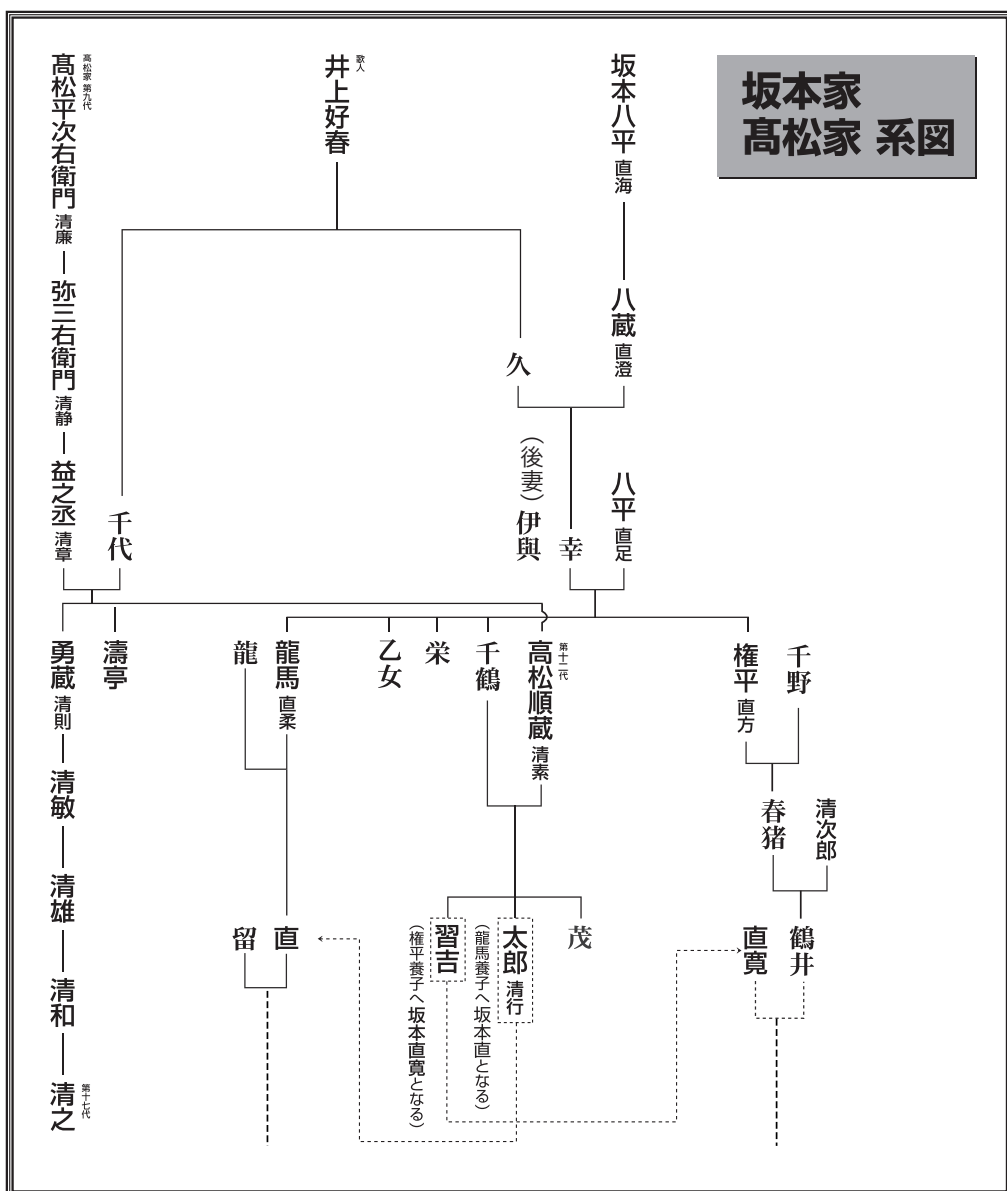
現代龍馬学会のみなさんへ

現代龍馬学会のみなさんには、記念館とともに、これまでとは違う新しい展開を考えてほしい。また、龍馬学会だけでなく、各地の史談会やいろいろな歴史関

係の会はさらに裾野を広げていかなければならない時期に差し掛かっていると思う。龍馬学会も頭に「現代」がついている意味を考え続けていくことが大切だ。幅広く、間口を広げて龍馬との関わりを追究する。学会設立の精神に立ち返って、会員一人ひとりが自らの役割を確認していくことも大切だろう。これからも総会・研究発表会だけでなく、理事会や例会を通じて会員相互の交流を活性化させていきたい。

※龍馬記念館も現代龍馬学会も、新しい時代を迎えました。高松館長さんの先を見通したお話を参考にして確かな歩みを進めていきたいものです。

坂本家 高松家 系図



☆高松清之

(たかまつ・きよゆき)

profile

1953年 高知県生まれ
中央大学法学部卒業
1976年 高知県庁に入庁
農林部、総務部、企画部を経て、人事企画課長、政策推進課長、観光部副部長、商工労働部長、危機管理部長を歴任。
2014年 高知県庁を定年退職
2014年 高知県信用保証協会会長
2016年 高知県立坂本龍馬記念館長に就任。

『幕末太陽傳』のこと

宮川 禎一

お正月前後に放送された古い映画を録画して、休日にとめて観たのだが、『幕末太陽傳』が面白過ぎたので、用意していた原稿を飛ばして、この映画について書きたい。日活が昭和三十三年（一九五七）に

ような昭和後半世代から見ればベラン女優だった方々も皆さん若くて美しい。道で背伸びする野良犬も名演技だ。面白いだけでなく何か人間の哀しみをえぐる部分も伝わってくる名作である。

制作したこのモノクロ映画は筆者が生まれる前、もう六十年以上も前の作品だが、日本映画の名作ランキングで常に上位にあるものだ。しかし名前を知っていただけでこれまで観ることがなかったのが自分史的に悔やまれる。

映像に携わる人ならこの映画の影響を必ず受けたはずだ。その代表例は宮崎駿の『千と千尋の神隠し』の湯屋であろう。また昨年の大河ドラマ『西郷どん』でひー様（一橋慶喜）と西郷吉之助がやりあう遊郭の設定にも影響があったはずである。

江戸の古典落語のいくつかを題材に、文久二年の品川宿の「相模屋」という遊郭でくりひろげられる軽快な人間絵巻だ。フランキー堺が主役だが、こんな役者だったのかと大いに感心させられた。御殿山の英国公使館の工事現場を焼き討ちする長州藩士らも登場する。若い石原裕次郎が高杉晋作を演じているが、はっきりいって添え物だ。戦後の作品らしく反長州的な匂いもある。なんといつても時代劇全盛時代の良さが溢れている。遊郭の豪華なセットや品川の海辺、食物調度小物、着物をさうと着る俳優の所作にいたるまですみずみに神経がいきとどいている。幕末の遊郭に本当に居るようだ。私の

すでにこの映画をご覧になっている方々からは「今頃遅いんだよ」と言われそうだが、まだ観ていない人に言いたい。「面白いです。御覧下さい」と。



「東海道五拾三次之内 品川」
歌川広重画 19世紀前半

コラム・龍馬のこと

「磊落な龍馬」

竹内 土佐郎

坂本龍馬と言えば、中岡慎太郎と共に東奔西走して薩摩藩の西郷隆盛、長州藩の桂小五郎らの大物を動かし、薩長同盟を成立させ新しい明治の時代をもたらしたことに思いを馳せる。

龍馬の討幕への始まりは、指導者武市半平太の土佐勤王党に入党してからである。同志坂本龍馬と中岡慎太郎の二人が武市半平太の家を訪れた時の逸話がある。半平太の妻富子が言うには「慎太郎さんは、大変に行儀のよい方で部屋に通られても容姿を崩されたことはなく、柿などをむいて勧めても辱のうござると言われるだけで、手を出そうともされなかった。それに比べ坂本さんは、たいそう無遠慮な方で、こちらが勧めもしないのに勝手に取って、皮もむかずに食べられる方でした」と。また或る日のこと、龍馬が半平太の家の庭先で放尿しているところを見た富子は、半平太に注意を言うと「放っておけ龍馬は国を動かす男だ」と言って何も言わなかった。龍馬は磊落で、慎太郎は実直な性質の持ち主であったようである。

龍馬は、身分差別の激しく保身的な幕藩体制を崩し、民主的な新しい国づくりを考えていたのである。その為に龍馬は「薩摩藩と長州藩との同盟を実現させ、強力な討幕勢力を作りたい」という大きな目標を持っていた。今の幕府には、この国の舵取りはできない、薩長同盟を何んとしてでも実現させて大政奉還にもっていきたくて強く思っていた。龍馬は慎太郎と尽力した会見が一度は失敗したが、西郷によく話をして了解いただくことになった。

慶応二年（一八六六）一月二十一日、薩摩藩の西郷と長州藩の桂は、密約を交わして薩長同盟は成立したのである。

これも磊落な龍馬の社交術と行動力によるものであった。

第11回

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表会

テーマ 「龍馬の生きた時代を考える」

日時 2019年5月25日(土) 10:00～17:20(会員総会9:20～)
会場 高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール
定員 120名(参加無料・要申込)

【特別講演】10:10～

宮川 禎一 氏（京都国立博物館 上席研究員）

「寺田屋登勢と坂本龍馬 ― 登勢の手紙の真意 ―」

【研究発表】

11:40～ 亀尾 美香 氏（坂本龍馬記念館主任学芸員）

「岡崎菊右衛門日記にみる幕末の土佐」

14:00～ 今井 章博 氏（高知近代史研究会会長・土佐史談会副会長）

「龍馬十五年忌祭をめぐる元海援隊士達の動向(仮題)」

15:00～ 佐竹 敏彦 氏（龍馬脱藩祭代表）

「龍馬のころを伝えたい」

16:10～ 広井 護 氏（土佐中等高等学校国語教師）

「『竜馬がゆく』のスリルとサスペンス」

参加ご希望の方は現代龍馬学会事務局までお申込みください。

【お申込み・お問合わせ】

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会事務局

電話 088-841-0001 F A X 088-841-0015

MAIL gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp